OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	唐代両京地方出土塔式罐の研究
Author(s)	唐, 麗薇
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/92012
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　　名　（　　唐　麗薇　　）	
論文題名	唐代両京地方出土塔式罐の研究

論文内容の要旨

塔式罐とは、外部形態、とりわけ蓋のつまみが相輪状の塔を模倣した複合式の土製・陶磁製罐類の通称である。唐代の長安・洛陽とその周辺の岐州・陝州を中心とした両京地方では、当該地域の墓に塔式罐が副葬されることが少なくない。それらの塔式罐は無釉の土製品が出土の多数を占めている。本研究は、上掲の各地域出土の土製塔式罐の形態や文様を比較して地域性や時代性の検討を行い、製作技術などの伝播に基づいて塔式罐生産の歴史像を浮き彫りにした。以下、各章の概要を述べる。

第１章では、本研究の目的として、塔式罐の型式学的検討を通して、唐の手工業生産や地域間関係の実態とその歴史的背景を解明することを掲げた。また、多岐にわたる概念による混乱を起こさないように、本稿に用いる研究対象とそれに関する歴史地理学・歴史学の用語のうち、地域名称や年代区分名などに関する整理を行なった。

第２章では、これまでの塔式罐関係の諸研究に関して研究方法・概要・結論などを整理し、特に塔式罐の分類・編年の検討内容について参考になる点と検討が不足する点を指摘した。その上で、本研究の課題を以下の５つにまとめた。すなわち、「３部位完存資料を対象としてきた制約」・「部位ごとの型式学的分類と全体の類型化を同等に重んじる必要性」・「特殊事例への偏重と一般土製品の検討の必要性」・「外形の重視による分類基準の曖昧さ」・「地域差を考慮した検討の不足」である。

第３章では、第２章で指摘した先行研究の課題に基づき、本研究の方向性と塔式罐の新たな分類を設定した。方向性としては、①塔式罐の蓋・座ごとにわけた器形の分類、②細部形態と法量分析に基づいた明確な型式学的分類基準の提示、③時期的変遷と地域差を考慮した編年、④小地域ごとの系統差をふまえた塔式罐全体の類型化を試みていくことにした。

新たな分類基準として、まず罐蓋では、つまみの形状（模倣対象の形）・下端部形状・天井部の膨らみなどの外部形態だけではなく、中実か中空の区別がある内部構造にも着目することにより、７類型を設定した。次に罐座については、閉塞型か開放型かの区別がある上部形状・上端部（上部の端）の突出の度合い・脚部のくびれの度合い・法量差で、12類型を設定した。塔式罐全体としては、罐蓋・罐座のみならず罐身をも含め、共通した細部形態ができるだけ多い点をもとに類型化をする。この類型化作業に基づき、各地域における塔式罐の製作者やその集団の様相を推測し、両京地方の各地間関係および各小地域の関係性の検討も可能となると考えた。

第４章～第７章では、上記の整理を踏まえ、長安・洛陽・岐州・陝州のそれぞれで出土した塔式罐を対象にして年代的変遷や地域間関係の復元を目的とする検討を試みた。この４地域出土の塔式罐の形態的特徴・時期的変遷およびそれらに見る製作者集団の動きについては、歴史的背景とつなげる推論も進めた。

まず第４章では、長安における塔式罐を検討した結果、画期は８世紀中頃に求められた。具体的には、８世紀中頃に罐蓋が中実から中空へと変化し、罐座に上端部の突出が明確となったことが確認できた。それに加え、罐蓋の下端部の形状・縦断面の形状（内外面の輪郭）・つまみの外形および罐座の脚端部の外面に廻られた沈線の有無も８世紀中頃を境にして変化が生じた。それらの歴史的背景は磁器生産の拡大、安史の乱による人口移動と技術交流、さらには長安の製作者集団間相互の影響などが想定された。塔式罐の全体としては、13の類型が設定された。その変遷は大きく四期に分けられ、720年前後・764年頃・820年前後の３つの画期を見出した。このうち、８世紀中頃の画期には塔式罐の形状が大きく変化したが、唐長安城の東西における差異がやや小さくなる傾向があり、異なる製作者集団の間に技術混交が進んでいった可能性が考えられる。

第５章の検討は洛陽出土の塔式罐を中心とした。罐蓋・罐座の分類とそれらの時期的変遷を整理した結果、両者の画期はともに８世紀初め頃～中頃および９世紀初め頃に求められる。具体的には、第一の画期は中実の罐蓋の消滅と罐蓋・罐座の特殊事例が集中的に見られることが特徴である。第二の画期は罐蓋の器形の陝州化および開放型

な罐座の消滅を指標とする。それに加え、８世紀を通じて罐蓋の下端部にかえりが内側へ突出した形状を維持していたことも特徴として指摘できるが、それは洛陽周辺に鞏義窯をはじめとして三彩陶器や磁器の製作が盛行することが影響したものと考えられる。また、塔式罐の全体として６の類型が設定され、長安とやや異なる四期に分けられた。類型ごとの編年的関係と小地域分布の変化から、８世紀初め頃・764年頃・840年前後の３つの画期を見出した。塔式罐の類型にみる諸系統は、長安系・洛陽在地系・陝州関係品に大別できる。その中で、陝州関係品は長安系・洛陽在地系が消滅した後に出現したことから、９世紀以降に両京地方の塔式罐製作中心地が陝州に移転したという歴史状況と関わるものと推察した。

第６章では、長安の西にある岐州出土の塔式罐について検討を行なった。画期は洛陽の出土品と同じように、８世紀中頃と９世紀初頭に求められる。また、岐州出土の塔式罐全体を４類型に設定し、三期に分けた。類型ごとの編年的関係と小地域分布の変化から、764年頃・800年前後の２つの画期を見出した。系統としては、長安系をはじめとした外来系と岐州在地系が挙げられるが、後者が終始安定して主導的である。その背景については、岐州が安史の戦乱の波及を回避できたため、塔式罐の製作も岐州在地の技術系統が主導である製作者集団によって維持された可能性を想定した。ただし、９世紀以降に岐州出土の塔式罐は普遍的に罐座が伴わないことが特徴であり、在地の罐座の製作が衰退していく傾向が看取できる。このことは、９世紀に塔式罐製作の盛期を迎えた陝州が両京地方の塔式罐製作中心地となったことと関わっていると考えた。

第７章では、長安と洛陽の間の陝州出土の塔式罐を中心にして検討を行なった。陝州出土の罐蓋・罐座の画期は概ね洛陽・岐州と同じように、８世紀中頃（764年）と８世紀末頃・９世紀初め頃（800年前後）に求められる。８世紀後半・９世紀の罐蓋ではほぼすべてかえりが内側へ突出した形で共通していた。それは安史の乱後に東方の洛陽から磁器生産・供給の拡大による技術や意匠の刺激があったことによるものと考えた。陝州出土の塔式罐の全体類型化とその編年については６類型を設定し、三期に分けた。類型ごとの編年的関係と小地域分布の変化から、岐州と同じように764年頃・800年前後の２つの画期を見出した。また、陝州の塔式罐は全体的に陝州在地系が主導的だといえる。地域ごとの塔式罐の各類型の消長を考え合わせると、９世紀以降に塔式罐製作の中心地が陝州に移転した可能性が高い。それは９世紀以降に起こった陝州の都市機能の転換と関係していると考えられる。

第８章は塔式罐の文様に注目した。塔式罐に施された加彩文様や貼り付け装飾に関する検討を通して、両京地方の地域間関係の復元してみた。これは、第４～７章が器形を中心とした検討であったのを文様から検証するものでもある。まず、塔式罐における装飾文様の先行研究を整理し、これまでほぼ注目されてこなかった加彩文様の空間配置・典型性を有する加彩蓮弁文および一部の貼り付け文様の模倣対象とその意味の検討を課題として指摘した。また、両京地方の４地域出土の塔式罐における加彩文様の空間配置について、罐身・罐座を対象にして、意図的に区画表現が作られたパターンと任意に施文されたパターン、の２大別があると指摘した。この２つのパターンは共有された製作情報として、時期の下るにつれて発信源の長安から、８世紀前半が長安・洛陽、740～760年代が岐州、９世紀が陝州へというように重点が移動した。それは地域ごとの塔式罐そのもの消長にも見合う傾向が見て取れる。また、製作者やその集団は規模が大きな都城において広く情報共有がなされていくのに対して、規模が相対的に小さい地方では集中的に生産された状況が読み取れた。

終章では、上記の成果を整理しつつ、文献の記載を踏まえ、両京地方の塔式罐をはじめとした土器の製作がいかなる生産・管理体制の下に行われたのかについて予察を試みた。その結果、唐代の両京地方出土の塔式罐には、甄官署をはじめとした官営工房の製品がある一方で、大多数が商品として流通した一般的な土製品であると推測した。また、後者について、少なくとも東西両方向に凶肆を持つ市場が存在した長安には、塔式罐の入手は墓地が凶肆に対応するような所在地と関わって小地域差を生んだ可能性が高いと推測した。

このように、長安・洛陽・岐州・陝州の唐墓出土の土製品が主体である塔式罐の形態・文様の検討を通して、地域ごとの時期的変遷と系統の特徴を明らかにし、墓の副葬品にみる画期や歴史的意義を導くとともに、小地域における生産と流通の実態や両京地域内の各地間の関係性を復元することができた。特に、対象とした４地域を中心とした両京地方において、塔式罐の製作中心地は長安・洛陽の両都城から地方都市の岐州、さらに陝州へと移った傾向も確認できた。この製作盛行地の移転は、各地域における製作者やその集団の技術交流に伴う現象であるとともに、８世紀中頃の安史の乱によって生じた一連の社会的変化と密接な関係性を持っていたことが推察されるなど、これまでに知られていない歴史事象も浮かび上がらせることができた。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　唐　麗　薇　）		
	（職）	氏　名
論文審査担当者	主 査　大阪大学　教授 副 査　大阪大学　教授 副 査　大阪大学　教授 副 査	高橋　照彦 福永　伸哉 藤岡　穣

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式７別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　唐代両京地方出土塔式罐の研究

学位申請者　　唐　麗　薇

論文審査担当者

主査　大阪大学教授　　高橋　照彦

副査　大阪大学教授　　福永　伸哉

副査　大阪大学教授　　藤岡　穣

【論文内容の要旨】

塔式罐は、蓋のつまみが仏塔にみられる相輪状の形態を呈した土製壺類の総称であり、唐代において墓葬への副葬が盛行した器物である。本論文は、この塔式罐について型式学などの考古学的分析手法に基づいて、唐の都である長安・洛陽やその周辺地域の手工業生産ならびに地域間関係の実態解明とその歴史的背景の考察を試みている。本論文はＡ４判 335 頁（本文は 400 字詰の原稿用紙で 403 枚、図は 295 点、表は 16 点）であり、構成としては第１章～第８章と終章からなっている。

まず第１章において、本稿の研究対象や関連する歴史地理学・歴史学の用語などの整理を行なったうえで、第２章では、塔式罐にかかわる既往の諸研究を網羅的に検討し、とりわけ基礎的な分析に用いる塔式罐の分類や編年に関する問題点を指摘した。具体的には、蓋・身・座の３つのパーツからなる塔式罐についてそれぞれの部位ごとに詳細な検討を加えることが不十分であった点や、対象が特殊事例に偏重していた点、小地域差を考慮した分布論的な研究が不足していた点をはじめ、いくつもの課題を掲げる。第３章では、塔式罐の蓋と座について、それぞれの構成要素をもとに器形の細分を行い、計測箇所を設定した上で法量の分析を加えることにより上記の分類の妥当性を検証して、以下の章での検討の基礎としている。

第４章～第７章では、都である長安・洛陽とそれらの周辺に位置する岐州・陝州の４つの地域を対象として、その地域ごとに塔式罐の蓋や座などについて、細部の形態分類に基づき器形の構成比率やその変遷過程を解明した。さらには、罐の蓋や座に身を組み合わせたセットとしての類型を設定し、それぞれの類型が各所の墓地において如何に出土しているかを確認することによって、その類型ごとの生産と供給の実態、あるいは各小地域間での技術や意匠の関係性の復元を目指している。その成果をふまえ、上記の４地域から出土した塔式罐の時期的変遷の画期や製作者集団の動態を導き出して歴史的背景も考察している。

例えば長安では８世紀中頃を境にして大きな変化が生じており、磁器生産の拡大による影響や安史の乱による人口移動などに伴った技術交流などを看取している。一方で、長安の東西にみられる小地域性から、少なくとも東西には別個の生産者集団を推測でき、時期が下るに従ってそれらが技術的に混交していく変容過程も明らかにした、また、より広域的には塔式罐の製作中心地が長安や洛陽から地方都市である岐州に、さらに９世紀には陝州へと移った動向も詳細に抽出している。

第８章では、塔式罐の文様に注目し、加彩文様や貼り付け装飾などの側面から、文様の意義や両京地方の地域間関係の復元を試みている。文様にかかわる製作情報は、生産開始が古い長安から８世紀前半には洛陽にも共有され、８世紀中頃の 40～60 年代には岐州、９世紀には陝州へというように重点が移動しており、塔式罐そのものの消長に対応する様相を見出している。

終章では、上記の成果を再整理した上で、文献史料の記載をふまえて塔式罐の生産・供給体制について推察を加えている。その結果、両京地方出土の塔式罐には、甄官署をはじめとした官営工房の製品がある一方で、大多数の土製品は商品として流通したものとした。後者としては、東市・西市に凶肆を持つ長安では、凶肆で塔式罐の入手がなされた可能性が高く、凶肆や墓地に対応する生産集団の存在が小地域差を生んでいる状況を導き出すなど、両京地域での土製品の生産・供給関係の復元において多くの成果を提出した。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、図表の合計が 300 点を超え、図表だけの頁数としても A4 判で 120 頁近くに及ぶ力作である。唐代考古学において十分に検討されてこなかった無釉の土器類を重点的に分析した点は、研究の手薄な部分を埋める研究成果として価値を持つものであり、各種土製品への分析にも敷衍できる可能性を内包しているものといえる。

また、塔式罐そのものについては、従来の研究を網羅的に再検討して課題を抽出しており、この分野の研究を総括する点で意義の大きい論文になっている。第３章以降では、部位を分けて新しい視点から型式学的な分類案を提示している点や、それらの蓋や座などの分類案を統合して類型を設定する点など、従来の研究を克服するものである。とりわけ、長安などの都市の周辺墓地を区分したうえで、小地域間での様相の相違点や共通性から生産・供給関係を復元する手法は、これまで当該分野の研究では試みられておらず、様々な新知見をもたらしている。その一方で、都が置かれた地域と周辺地域とを対比的にとらえて、両京地方内での塔式罐の技術や意匠の相互関係を把握する点など、これまでの唐代考古学研究を刷新するような方向を示しており、その膨大な基礎的な作業から導かれた結果は価値の大きい成果と評価できる。

しかしながら、問題点も残されている。分類や類型の説明が煩瑣で、整理が行き届いていない点や、結論に至るまでの資料数が少ない部分を含んでいる点など、分析の質をさらに高めうる余地が少なくない。また、確認された諸現象の歴史的背景については、多くの側面を視野に入れた十分な追究がなされているとまではいえない。さらに、もともと議論の多い塔式罐の性格論などについては、今回の分析から新たな提言がなされるまでには至っていない点も惜しまれる。

とはいうものの、本論文で示されたような、法量分析も含む新視点の分類方法や、型式学的分析を徹底しつつ分布論と組み合わせる分析手法により、唐代土製品研究において従来は焦点が当てられてこなかった手工業生産の側面について新たに解明する道筋をつけた点など、十分に大きな学術的意義を有するものである。よって、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。